二〇一四年六月一七日（参加者一〇名）

小流れの奏づに添ひて避暑散歩　わかば
比翼塚やすかれと訪ふ木下闇　〃
小流れが樹林縫ひゆく涼しさよ　〃
簾越し奥の生活の見えにけり　よし子
梅雨じめりして刻告ぐる古時計　〃
妙見山の谷戸を埋めて栗の花　〃
池の蓮風に巻葉を解かんとす　満天
美容師の鋏さばきの音涼し　〃
寺池を荘厳したる半夏生　〃
麦秋のまっただ中や新幹線　有香
山の駅夜目にも白き栗の花　〃
比翼塚いま盛りなる濃紫陽花　ぽんこ
水馬三段跳びを見せにけり　〃
四阿の涼し棋士らは白熱す　ひかり
着継がれて今洋服の白かすり　小袖
寡黙なるボランティア女史汗しとど　こすもす
城址に幾星霜や露の歌碑　はく子
卓涼しばらの花茶のもも色に　〃
隠沼に響くバリトン牛蛙　〃
樹下涼し童地蔵の面も又　〃
葛畳池塘の径へ迫りけり　〃

定例句会みのる選

二〇一四年六月一七日（参加者一〇名）